

勝ち目はあるか!?

花粉症 vs 政治

東京都議会議員 レポート

Vol.33  西崎つばさ

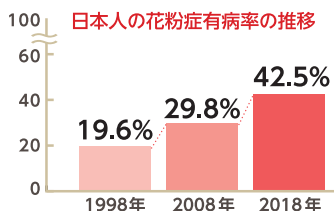
花粉症シーズン。私自身も当事者ですが、毎年こんなに辛い思いをしているのに、政治は何もできないのか、そもそも戦後の植林政策による公害ではないか、との声も聞かれます。そこで、最近の動きも含めた花粉症対策についてご報告します。



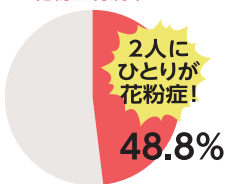
花粉症の実態

花粉症が初めて学会で報告されたのは、今から実に62年前。現在、どれほどの患者がいるのでしょうか。

日本耳鼻咽喉科学会の調査によると、花粉症の有病率は以下の通り、ほぼ10年毎に10ポイントずつ増加しています。



2016年の東京都の花粉症有病率



また、2016年の東京都による調査では、有病率は48.8%と推計され、都民の2人に1人は花粉症であるという驚きの結果が示されました。

各種調査による経済的な影響を見ると、労働力低下による経済損失額は1日あたり約2320億円、飛散期の家計消費への影響はマイナス3831億円という試算もあります。医療費は、保険診療が2019年に3600億円、市販薬が2022年で400億円と推計されています。

国会・政府の取り組み

1970年代に厚生省が研究を開始し、1990年には関係省庁の連絡会議を設置。2004年には専門家も交えた「花粉症対策研究検討会」が発足しましたが、年1回の会議程度で、あまり進展がありませんでした。

時は流れて2023年の春、当時の岸田総理が意

欲を示したことを契機に、国会で超党派の「花粉症対策議員連盟」が設立され、150名もの議員が参加しました。

その後、史上初めて花粉症に関する閣僚会議が開催され、今後の方針である「花粉症対策の全体像」を決定し、秋には具体策も公表されました。(裏面で紹介します)

東京都の取り組み

都は、1983年に花粉症対策検討委員会を立ち上げ、飛散量の測定や患者実態調査を開始。さらに、自身も発症した当時の石原慎太郎知事が対策を強化し、2005年には花粉症対策本部を設置して、森林対策や保健医療対策などを進めました。

2007年度からは、「無花粉スギ」の研究に取り組み、長期間のプロセスを経て、ついに2020年から23年にかけて、4品種の開発に成功しました。

2024年には、この無花粉スギを大量増殖するため、住友林業と協定を締結。2030年までに年間10万本の苗木の生産を目指しており、これは私も昨年11月の委員会で取り上げました。(裏面に続く→)



「花粉症対策の全体像」 のまとめ

① 発生源対策

- 2033年度にスギ人工林を2割減、2053年度に花粉発生量を半減
- スギ材製品への転換促進、木材活用大型建築など需要の拡大
- 花粉の少ないスギ苗木の生産量を、2033年度に全体の9割以上に（現在は約5割）
- 高性能機械による林業の生産性向上、外国人材や新規就業者など労働力の確保

② 飛散対策

- 調査地点の倍増、スギ人工林のデータ公開やAI活用、画像解析による実測など、飛散量予測の精度向上
- スギ雄花を枯死させる飛散防止剤を、2028年度までに実用化の目処を立てる

③ 発症・曝露対策

(1) 花粉症の治療

- 舌下免疫療法の周知啓発、治療薬の供給量を2028年度までに4倍増
- 専門機関における治療法、治療薬の開発

(2) 花粉症対策製品

- JAPOCマーク※の認知度向上、取得製品の拡大および普及
- スギ花粉米の実用化に向けた研究

(3) 予防行動

- 柔軟な働き方など、企業による曝露対策の推進

※JAPOCマーク

花粉対策性能・使い心地の両基準をクリアした製品の認証マーク。JAPOCとは、空気清浄機やマスクなどのメーカー12社と学識経験者による団体です。



本当に対策は進むのか？

ここからは私見ですが、今後の花粉症対策の展望を示したいと思います。

〈森林対策〉



伐採・植替え

発生源となるスギ人工林のうち、これまでの植替えは国全体で1%以下。都に限っても2%程度に留まっています。林業の担い手不足も深刻ですし、植替えに対する森林所有者の理解促進も必要です。この対策がすぐに効果を発揮するのは難しいと言えるでしょう。

飛散防止剤

花粉を出すスギの雄花を枯死させる、自然由来の飛散防止剤が開発され、ドローン等による散布実験も行われています。花粉を9割減らすとされており、実用化に大きな期待がかかります。森林対策は、こちらが現実的と思われる。

テーマを問わず都政に関するLINEメッセージをお寄せください。下記メールアドレスでも受け付けております。



〈治療〉

舌下免疫療法



最低でも3年は必要となる治療ですが、7割の患者に効果が認められています。2018年に保険適用、2022年には診療報酬上の評価も新設され、今後の普及が課題となります。まずは現在の治療薬不足の解消が求められます。

スギ花粉米

花粉症の原因物質を蓄積させたコメを摂取することでアレルギー反応が抑えられるもので、既に臨床研究も行われ、効果も確認されています。

政府の方針では、このスギ花粉米を応用した医薬品を想定しており、新たな治療法として注目されますが、実用化には時間がかかりそうです。

実は、今回ご紹介した対策のほとんどは、20年前の資料にも見られるものです。大きな進展がないとも、長年の努力が結実しかけていたとも言えますが、この間に花粉症で悩む方が激増したことは事実であり、引き続き大きな政治課題として取り組みます。

東京都議会議員 レポート 西崎つばさ

1983年生まれ、41歳。円融寺幼稚園、向原小、目黒九中、都立青山高、東京外大英語科卒業。手塚よしお秘書、蓮舫秘書。目黒区議2期、都議1期。

